

一番が子の千三百六十五番か、そう／＼私も昨日宿屋の亭主から一枚買ふたある、まてよー、私の買ふたのが、子の千三百六十五番と、フーム、こら當らんもんやなー、澤山たかの中やで、二番が辰で、三番が寅と、私のが、子と一番が子の千三百六十五番と、私のが子の千三百六十五番か、こらあかん、いよ／＼一文無しの、空けつと決つたなあ、あれが子の千三百六十五番と、こうなると小水が掛るなア、私のんが番の五百六十三の子……………こら逆様や、子の千三百六十五番と、ハハン、チョツトの違ひやで、彼れが子の千三百六十五番で、私のんが子の千三百六十五番と、彼れが子の千三百六十五番で、私のんが子の千三百六十五番と、五番や、子と子と、千と千と、三と三と、百と百と、六と六と、十と十と、五と五と、番と番と、ア……………アアタタタアタタタタ

「モシ貴郎、何ないにしなはつたんや」

「アタタタ……………」

「へエ、當りましたか」

「アタタ、、……………」

「當つた、ア、當つた、いんで待つてなはれ、世話方が、すぐに、金を持つて行きます、いんで、待つてなはれ」

「あたゝゝゝ、あたゝゝゝ」

「あんだ、何をしてなはるね」

「懐中ふところが知れまへんね」

「あんだ、外を、探してなはるがな」

「あゝ、左様か、あたゝゝゝ、何んで此様に震へるねんやろ、昨日、宿屋の亭主に、偉らそうに言ふて、旦那さん、富が當りましたと、云ふたら、當つたら宜えいぢやないかいなー、と此れが納まつて、言へんかいな、何んで此様に震へるのんやろ、あたゝゝゝ、ハイ、今歸りました、あたゝゝゝ」

「オ、旦那さん、お歸り遊ばせ、えらう早うにお歸りになりましたなあ、マア旦那さん、何う遊ばしたの  
で御座います、顔の色が悪うて、震ふて御座る」

「震いますとも、これが震はずに居られますか」

「何う遊ばしたので」

「昨日亭主に話をした、二萬兩の口、行つた處が、證文がとうとう、判が違ふとかで、ごて／＼言ふたので、私は腹が立つて腹がたつて、私は、喧嘩まくで歸つて來たので、氣色が悪い、これぢやから、錢の無い者、相手にするのは嫌いぢや、今日は誰が來ても、會はん、二階へ、寢床を取つてお呉れ、あたたた」

二階へ上つて頭から蒲團を冠つて寢ました。宿屋の主人さんも、氣なりませんので、高津さんへ参り